

## 第7章 アイヌ・非アイヌの人々が語る 差別の諸相

佐々木千夏

旭川大学短期大学部准教授

### はじめに

本章では、アイヌの人々および地域住民を中心とした非アイヌの人々双方の語りの中から、アイヌ差別に関する内容に注目していく。

アイヌ差別は、和人からアイヌの人々に対するものとしての民族差別と、“アイヌ民族”とカテゴリー化できる人々の内部で生じる民族内差別とに分けて捉えることができる。後者は混血が進むことによって生じる民族としての血の濃さにもとづいていたり、アイヌだけでなくまた別のエスニシティももっていたりする場合、婚姻によってアイヌ社会に入っていった和人の場合など、“アイヌ民族”的多様化にともなって生じるという意味で、どちらかといえば新しい差別のかたちである。こうした民族内差別の実態にもふれながら、以下、アイヌの人々への差別に関する内容を主軸として分析していく。

分析の対象とするのは旭川市をフィールドとしたアイヌの人々へのインタビュー調査の結果と、地域住民へのインタビュー調査の結果である。これまで道内の他の地域で行ってきた分析方法と同様に（佐々木 2016ほか）、まずアイヌであることによる被差別経験の有無と、世代別男女別のエピソードの特徴を把握する（第1節）。くわえて、自分自身は被差別経験をもっていないアイヌの人々が語る“アイヌ差別”に注目する（第2節）。そして、非アイヌの人々の語りから参照できるアイヌ差別の様相を確認する（第3節）。最後に第4節にて、本章のまとめと考察を行う。

### 第1節 アイヌの人々の被差別経験

#### 第1項 被差別経験の有無

本章で分析するアイヌとしての対象者は11名である<sup>1)</sup>。

これまでの生活の中で、アイヌであることを理由に差別された経験<sup>2)</sup>は、半数弱の5名が有する（表7-1）。5名中4名が女性、1名が男性ということで、ケース数の少なさや性別の偏りはあるが、他の地域と同様、アイヌ女性のほうからより多く被差別経験が語られていることになる。

世代別による被差別経験をみると（表7-2）、この点も対象の選定の時点では偏りが存在しているが、被差別経験があるのは50代、60代に集中しており、30代、40代、そして70代以上で被差別経験をもっている人はいなかった。被差別経験のある50代、60代では、被差別経験がない人よりもある人のほうが優勢となっている。

表7-1 被差別経験（男女別）

単位：人

	あり	なし	合計	差別の経験率(%)
男性	1	3	4	25.0
女性	4	3	7	57.1
計	5	6	11	45.5

表7-2 被差別経験（世代別）

単位：人

		あり	なし	合計	差別の経験率(%)
青年層	20代	0	0	0	0.0%
	30代	0	1	1	0.0%
壮年層	40代	0	1	1	0.0%
	50代	2	0	2	100.0%
老年層	60代	3	2	5	60.0%
	70代～	0	2	2	0.0%
計		5	6	11	45.5%

## 第2項 被差別経験のエピソード

では、被差別経験のある5名の語りの内容に注目していく。

世代と性別の組み合わせによる被差別経験の持ち主は、壮年層（50代）女性が2名、老年層（60代）女性が2名、老年層（60代）男性が1名である。この順番でエピソードを確認することにしたい。

### （1）壮年層×女性（計2名中被差別経験者2名<以下、同様>）

これまで他の地域で行ってきた調査の蓄積のなかで、アイヌへの民族差別は①学校の中で、②恋愛や結婚の場面で、③就職の際や職場においてという3つの場面に集中してみられている。とりわけ学校生活におけるエピソードは数多く存在しているが、本調査の壮年層女性2名からも、それぞれ小学校、中学校での被差別経験が語られている。

一方の女性は、小学校3年生くらいのときに、近隣に住んでいた同じクラスの女の子から否定的なニュアンスで「アイヌの子っこ」と言われたことがあり、「いまだに忘れられない」出来事となっている。当時よりも後になってから、「ああいうこと言われたなあ」という嫌な思い出になってしまったという。

もう一方の女性は、中学校時代振り返って教員の態度が差別的だったと語る。

・私、今振り返って、大人になってから色々思ったのは、やっぱり中学校の時の先生は差別していたかなと思いますね。やっぱり親の職業を書く欄がどうしてもあるから、父はまああれだけど、母のところはやっぱり、民芸品販売と書いてあるから、やっぱりアイヌ民族の1人なんだろうなとい

うふうに思われた。思いますよね、当然ね。だからあの先生には多分そうだったんだろうなと。

(聞き手：それはどういう場面で感じましたか？)

・普通にみんなで騒いでいてもわたしだけを注意するとか。高校受験して、私ギリギリほんと公立高校に入れたんですけど、その時に、まあ学校へ行った時にね、みんなで喜んで、ワアってやっているじゃないですか、普通に。女子同士で「よかったね、よかったね、一緒に行こうね」とどうのこうのやっている時にみんなの前で「おまえなんかこのクラスで最低の点で受かったんだからな」とか。

それまでの学校生活においても「その先生」から「あのこと、このこともと思い当たる節」があったというが、上記の場面で「とどめさされたのがその時」と振り返る。こうした学校経験に含まれる差別に関しては、子ども同士のからかいやいじめだけではなく、教員からの差別というものがこれまで多く証言されている（新藤 2019）。子ども同士の関係性で生じるものより、大人から不当な扱いを受けるという被差別経験は、アイヌの人々の心により深く刻まれているのではないだろうか。

## (2) 老年層×女性（計5名中2名）

引き続きアイヌ女性に注目し、一世代上の老年層に目を向けてみる。老年層女性2名からも、やはり学校での被差別エピソードが語られている。

しかもそのうち一方の女性からは、またしても教員からの差別が語られている。彼女は両親とともにアイヌの家庭に生まれ、両親とも木彫りの民芸品を作っていたり、それで生計を立てていた。小学校へ通うことはとても楽しみにしていたが、給食費や修学旅行の積み立てなどの集金日に、親に頼んでお金を持っていくことは難しかった。そのため、「1年生から6年生まで春夏秋冬」（罰として）立たされていたという。「男の先生のほうが意地悪で、差別した」ということである。そして、家庭の経済的な事情で高校に進学することはできなかった。こうしたアイヌの人々の貧困を理由とした差別は、他の地域でもとくに老年層を中心に把握してきた。

もう1人の女性も、学生時代のエピソードとして、子どもたちから「あ、犬いた」という言葉での差別を受けたり、追いかけられて雪の中に頭を突っ込まれたり、足を引っかけられて転ばされたりといいじめがあったという。その都度「お返し」をしていたものの、「学校時代に熱中したことや楽しかったことはとくにない」と語る。彼女も両親は当時木彫りの仕事をしていたということであり、中学校を卒業する頃の暮らしぶりはよくなく、もしお金があれば高校までは進学したかったという。

この2名のアイヌ女性からはともに、当時のアイヌの家庭が貧困であったこと、そしてこうした階層的差異を理由に学校において、教員からの差別を含む形でアイヌ民族に対する差別が横行していた様子をうかがうことができる。

一方のアイヌ女性からはさらに結婚時における被差別エピソードも語られている。彼女は中卒後、熊彫りの会社に就職した和人男性と結婚しようとしたところ、双方の両親から反対された。和人男性側の家族からは「ちゃんとしたところからもらう」ということで、アイヌの血筋であることが結婚の反対理由であったことがわかる。他方、このアイヌ女性の両親（ともにアイヌ）か

らは、「熊彫りと一緒にになってはいかん、将来がないから」と言われた。この両親も熊彫りを生業にしていたからこそ、「将来がないから」という助言は含蓄のあるものである。経済的な面ばかりでなく、民芸品生産業自体の「将来」への憂慮が感じ取れる。

### (3) 老年層×男性（計2名中1名）

最後に、被差別経験を語った唯一の男性である老年層のアイヌの生活史に着目したい。彼は学校において、恋愛の場面において、そして職場においてと、人生のあらゆる局面に被差別経験があったと語る。彼の生活史の流れに沿ってみることにしたい。

彼は旭川生まれ、旭川育ちである。保育園、小学校時代は良かったけれども、中学校のときにはアイヌであることを理由に「バカにされた」。小学校時代もからかわれる程度のこととはあったけれども、「中学校が一番ひどくなる」時期であった。

ただその際、彼は腕力が強くターゲットにならないこともあったが、同じ血筋にある親戚の男子は苗字をからかわれ、クラス中から囁き立てられて「泣け泣け」といったいじめを受けていたとのことである。この時のいじめには教員が仲裁に入ったということであり、アイヌへの差別に関しては、「先生による影響が大きい」と語っている。

初めて勤めた会社は4年で辞めることになる。その理由は、会社で金銭の窃盗事件があった時に、彼が「アイヌなのに服装もいいし、盗んだもので買ったのではないか」と疑いの目をかけられたことによる。その後、転職して請負制の仕事に就くことになった。はじめは働いたら働いた分だけの収入が得られて楽しく仕事をしていた。しかしそのうち、自分よりも多く働いていない和人のほうが多く給与をもらっていることが判明した。その理由は、会社の社長が「アイヌは国から補助を受けている」という勘違いをしており、彼を含めアイヌの人たちの給与を意図的に下げているからであった。こうした理不尽に遭い、アイヌの人たち全員でその仕事は辞めたという。同業の知り合いの和人男性は、和人だから給料が下がることはなかったという。彼は、結婚相手を選ぶ時に「女の人が普通の人（和人）に嫁ぎたいという理由はそこにあると思う」と述べている。

さらに、交際をしていた和人女性とのエピソードが語られる。その女性は教員志望で、就職の願書を出す時期に女性の親と会った際、「この子はね、学校の先生になりたくて、親が見てても、わあと思うほど頑張った。悪いけど身を引いてくれ」と言われたという。彼は、自分がアイヌであることが理由だったと考えている。彼はその後、別の和人女性と結婚するが、その結婚相手はアイヌに対する偏見を持っていなかった。彼女の家族も全く結婚に反対しなかったということであり、「差別するのは人による」と語る。

以上からこのアイヌ男性の人生においては、とくに職場でのアイヌを理由とした差別を繰り返し経験してきたことがわかる。就職の際や職場での民族差別は、これまで他の地域ではアイヌ女性たちからより多く語られてきた。というのは、アイヌの女性たちが多く従事する“水商売”系の仕事の中で、女性たちが接客中にたびたびアイヌであることを理由に差別されるエピソードが目立っていたからである。その意味で、このアイヌ男性の職場での被差別エピソードは、具体的で異彩を放つものである。

## 第2節 周囲で起きるアイヌへの民族差別

アイヌとしての調査対象者11名のうち、前節でみた5名は被差別経験の持ち主であった。つまり残りの6名は、これまでの生活の中で差別された経験がないと語っている。ただし、対象者自身が差別を被ることはなくとも、周囲でアイヌ差別が生じていたことは語りから把握できることもある。

たとえばある老年層のアイヌ男性は、自分自身は差別を受けた経験がないものの、学校では女の子がいじめられていた。泣いていた子もいっぱいいた。学校が終わって家に帰れば周りはアイヌの友だちがたくさんいるので良いけれど、学校内では何か言われて泣いていた。周りにいじめられている子もいる中で、自分が差別を受けなかったのは、「うまくわたって来たからかな」と語っている。

次に、ある老年層のアイヌ女性も、これまで差別は受けたことがないという。学生時代、苦労したことやつらかったことはない。彼女はいじめられている子からむしろ助けを求められることがあり、いじめっ子のところに行って「あんたちょっと」というとみんな黙った。彼女はおじ（和人）から、「アイヌがいじめられるのは頭が悪いから、いじめられないのはきかないから」と聞いたことがあった。そこから、自分がいじめにあわなかったのは「きかなかったから」と自負している。

以上の2名には、これまで差別を受けてこなかったのは「うまくわたって来たから」「きかなかったから」とそれぞれ理由づけがなされている。他の地域でのアイヌ調査でも、ケンカが強かったり子どもたちの間で中心的な存在だったりすることで自分自身はアイヌとしての差別を被ったことがないという人々の姿が散見される。ただし、こうした人々がアイヌへの差別とまったく無縁だったわけではなく、差別が生じる生活環境にいたということは紛れもない現実である。

## 第3節 非アイヌの人々が語る差別

### 第1項 和人配偶者の語りから

続いて、アイヌの血筋にはない人々の語りから見える差別の様相に着目したい。

はじめに、和人だがアイヌとの結婚によりアイヌ社会に入ることになった人々の語りをみていく。

ある老年層の和人女性は、夫がアイヌの血筋であり、2人の子どもがいる。結婚した当初、歳の離れた夫の弟たちが、貧しい家庭環境のために衣服が粗末でひどくいじめられており可哀想だった。彼女は洋裁ができたので、夫の弟たちにも服を作つて着せてあげた。綺麗な格好をするようになってからは弟たちへのいじめは少なくなったという。

夫との間のアイヌの血を引く娘は、小さい頃に周囲から「毛深いね」と言われた。娘自身は小さかったのでとくに気にしていなかったが、母親である彼女は保健婦に相談し、その頃から体毛の脱色をしていた。娘はその後成長する中で一切いじめにあうことはなく、自然にアイヌであることも認知していったという。

別の老年層の和人男性は、後に妻となるアイヌ女性と旭川市外で出会い、結婚した。その際、妻がアイヌであることによつて抵抗はなく、家族からも何も言われなかつた。ただ職場で一度、「あの人はアイヌの女の人と一緒になつてゐる」と言われたことがあつた。そのこと以外に

嫌な思いをしたことや、いじめにあったことはないという。

彼は結婚によってアイヌ社会に入り、チセの建て方を教わった。その技術を学ぶ中で、アイヌの人たちに溶け込んで、仲良くなるまでに長い年月がかかった。アイヌの人と同じように習っていても、1回や2回で覚えられなかったら「このシャモ」、「頭の悪い奴だな、覚えの悪い奴だな」と言われることがあった。現在、旭川市内に彼以外にチセを建てられる技術を習得している人はいないということだが、そこに至るまでに、アイヌ社会ではマイノリティとなる和人としての彼が、アイヌの人から差別的な言葉をかけられていたことがわかる。

この男性の事例には、アイヌ女性と結婚したことによって和人社会からはアイヌ側の人間として差別され、アイヌ社会では和人であることによって差別的な言葉を受けるという意味で、“ダブル・アウトサイダー”としての面が見て取れる（小野寺 2012）。民族差別も民族内差別も経験しうる存在としての和人配偶者の姿である。

## 第2項 地域住民の語りから

旭川住民調査で対象となった19名のうち、アイヌ差別に関する言及があり、ここで検討するものは6名と多くはない。大多数の住民は、これまでの生活史でアイヌへの差別は周囲で起きるようなことはなく、対象者自身も偏見ももっていないという状況である。

では、地域住民の6名にはどのような差別観ないし差別の状況をうかがうことができるだろうか。

まず、4名の男女から、とくに自分の親世代がアイヌに対する差別意識をもっていた様子が語られている。

ある50代の女性は、大正生まれだった母親がアイヌに対して人種差別的なことを口にしていたことを覚えており、「テレビとかでアイヌ人の特集をやったりしていると、ちょっと母は差別的な所がありました」と語る。

別の50代の女性も、現在80代半ばの母親からアイヌの人々との関わりを聞いたことがあるという。

・（80代の母親は）結構覚えていて。自分達の行く学校とそのアイヌの方の行く学校が別々だったらしいんですよ。だから、アイヌの方はアイヌ学校っていうのがあって。ちょっと言葉悪いですけど、アイヌ部落っていうね、アイヌの方達だけが住んでいる場所があって、やっぱり小さな熊なんかも飼ってたらしいんですよね。

ただやっぱりその通りって、なかなか普通の子とか行っちゃいけないって、言われていたらしいので、もうそこには近寄らないようにしていたって言っていました。

アイヌの方々って特別に一般の方々とお仕事しているわけではないので、いい大人がね、結構昼間ぶらぶらぶらしているようなところもあったので、ま、それも兼ねてとは言っていましたけど。

（聞き手：お酒を飲んで？）

そうですね。ただ取り立てて、母の記憶の中では、アイヌの方が悪いことをしたとかね、何かそういう問題を起こしたっていうことはないんだけども、何かといえば、アイヌの方のせいにされている部分もあったし。ただ、やっぱりアイヌの方の中でも、とってもいい方もいれば、いろんな知恵をつけられてね、ちょっと悪賢くなっちゃった人もいてっていうのは聞いていましたね。

以上の2名の女性は、親がアイヌに対して偏見をもっていた様子がみられるものの、彼女たち自身はアイヌ民族への偏見をもっているわけではなく、一人目の女性は「差別とか云々かんぬんは一切感じていません」と言い切っている。

一方、子どもの頃にむかわ町に住んでいたという50代男性は、以下のように語る。

・うちらのところも、子どものころって結構、アイヌの人たちが多くたんで、悪い印象ばっかり残っているんです。うちらのところ敵対の感覚みたいなものを持っていたとき、人種差別というところが多かったのかな、昔はね。そんなにひどいわけでもないけれど、体臭が臭いとか。うちのお袋なんかは毛嫌いしちゃって、すごかったんですけどね。そういうところの対立が結構ありましたよね。

彼が住んでいた当時のむかわ町では、アイヌと和人が対立関係にあり、アイヌへの差別感情は子どもだけでなく親世代も有していたことがわかる。私たちのこれまでの調査ではむかわ町も対象としているが、いくつかのアイヌ民族集住地区の調査の中でも、むかわ町の被差別経験率は高く、具体的なエピソードも豊富なほうであった（菊地 2012）。この男性の語りもそれに共通するものとして理解することができる。

くわえて、生まれも育ちも旭川という60代女性は、「恋愛や結婚の際に、相手の民族性を考慮するか」という質問に対して、「恋愛になるとかならないとかっていう前に、（アイヌの人に対しては）多分壁を作っていたんじゃないかな」と語り、以下のように続ける。

・私達って、結構世代的に知らないうちに偏見とかそういうのを植え付けられていた部分ってあるので。

ていうのは、なんだかわからないけど、なんか違うっていうことを。自分達は違うんだっていうことを、いつからかわからないんですけど、やっぱりあるんですよね。それがやっぱりこの辺、自分が住んでいた周りにはあったんだろうなっていう感じが。もしも、私がそういう相手を連れてきたとしても、親が絶対許さなかつただろうなみたいのはありますね。

この女性の語りに象徴的のように、壮年層男女の親世代のアイヌ民族に対する偏見はある程度明確なものであり、それが子どもの世代にも場合によっては再生産されていく可能性があると捉えてよいだろう。

残りの2名の住民に目を向けると、小学校時代の記憶の中から、学校で配られた「アイヌの人とお友だちになれるかどうか」といったアンケートの存在を話してくれた女性がいる。以下はこの50代女性の語りである。

・私が小学校の3年生、4年生、ですから昭和40年前半くらいの時、小学校の時にアイヌ人に関するアンケートがあって、すごいそのアンケートが印象的だったんだよね。「あなたはアイヌ人がクラスに転校してたら、一緒に仲良くやっていけますか？」とか。

（聞き手：学校でやったんですか？）

学校ですよね。個人じゃないですね。学校全体で。当時としては、そういう偏見というか差別的なのが平気で行われていました。

そういうアンケートがあって。アイヌ人に対してどう思うかとか、クラスに転校してたら一緒に、隣の席に座ってもいいかとかそういったアンケートがありました。それ印象に残っていますね。

実際に当時、旭川市の小学校でこうしたアンケート調査が行われたのかどうかは確かめることができなかったが、学校側としては差別を防ぐ目的で行ったのかもしれない。しかし、アイヌ民族と和人を異なるものとして捉え、差別を想定してその調査が行われていたという歴史は見過ごすことのできないものである。公教育の場でこうした取り組みがなされることによって、より多くの子どもたちにアイヌへの差別観を植え付けてしまいかねないだろう。

最後に、アイヌの友だちとのエピソードを語ってくれた50代女性がいる。彼女は、アイヌの友だちとも分け隔てなく接しており、アイヌを理由にいじめている人をいじめ返したり、やり返したりしていた。いじめる側は男子児童のほうに多く、女子児童の場合はアイヌの子どもに対し「汚いから」など、言葉でのいじめであったという。彼女は中学校時代に同じ部活だったアイヌの女の子と仲良くなり、互いの家に泊まりに行くくらいの仲であった。その友だちの家には宝物があり、泊まりに行った朝には、儀式としてのお祈りを見たこともあった。

こうした経験のある彼女は、いまだに差別の残るアイヌの人々に対して「何か少しでもお力になれたら」と感じている。「だいたい馴染の深い人を見たら『あの人、アイヌじゃないの』とかって、平気で言う人がたとはお付き合いしていません」と語っている。

このエピソードから、アイヌへの差別が横行していた時代にも、和人とアイヌの子どもたちの間に良好な関係性が築かれていた例もあることがわかる。そしてこうした経験が、その後の彼女にアイヌに対する偏見を形成せず、また、「何か少しでもお力になれたら」という現在のアイデンティティを導くに至っていることも把握できるのである。

#### 第4節 まとめと考察

以上、旭川市におけるアイヌの人々と地域住民のインタビュー調査の結果から、アイヌ差別の諸相について検討してきた。繰り返しになるが対象者の数が少ないため、安易に比較することには注意が必要だが、旭川市の被差別経験率の傾向について、これまでの道内の他地域調査との比較をすると図7-1、図7-2のようになる。

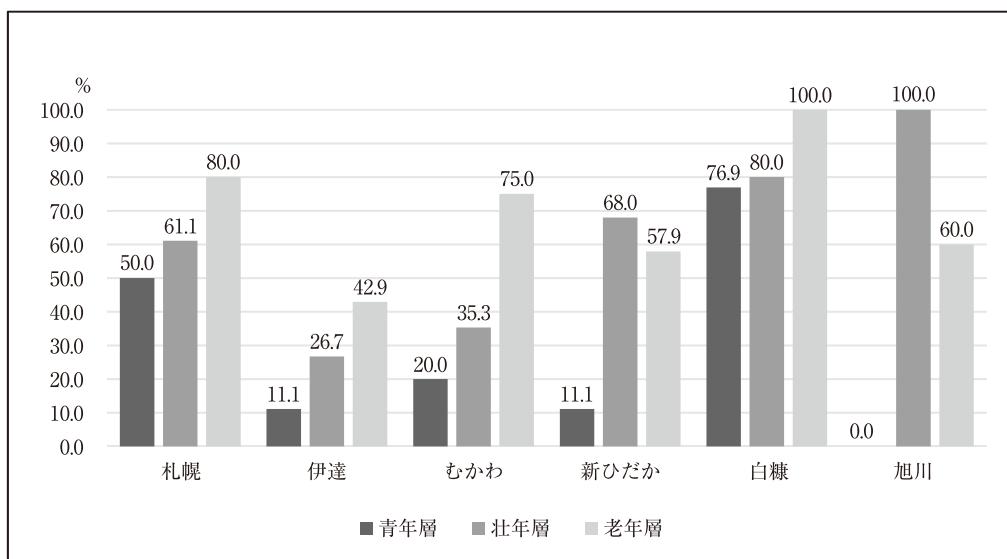


図7-1 地域別世代別被差別経験率

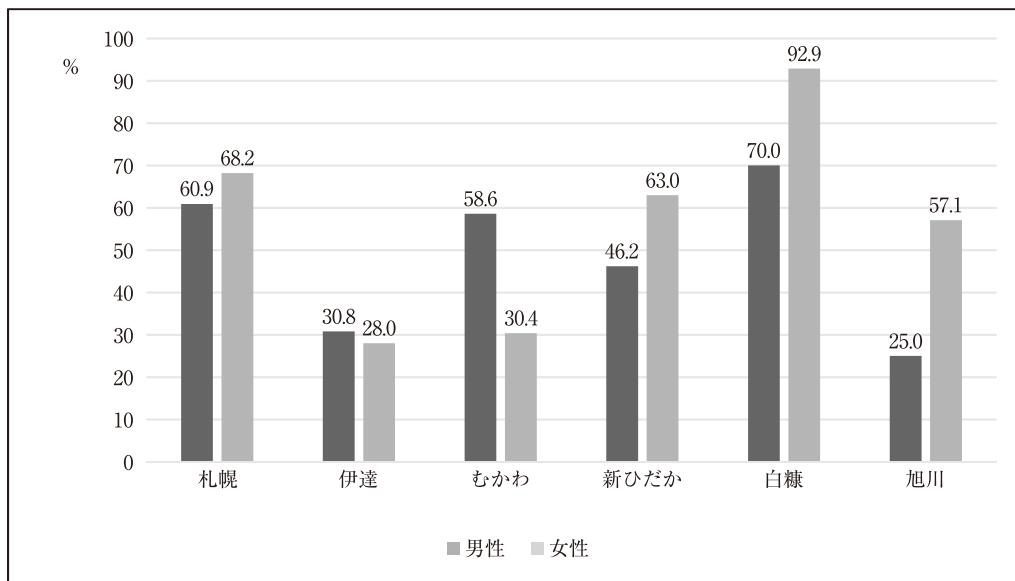


図7-2 地域別男女別被差別経験率

世代別の被差別経験率に関しては、旭川調査の場合、青年層が1名しかおらず、被差別エピソードを把握することができなかった。他地域では世代が上がるにしたがって被差別経験率が上がるというのが全体の傾向ではあるものの、旭川市は新ひだか調査と同様、壮年層に被差別経験者が多く集まっている。この世代は他の地域では、差別を避けるために親世代からのアイヌとしての継承が途絶えたり、アイヌであることを隠して生活したりすることで老年層よりは差別が抑制される傾向にあるのではないかと考えられた。旭川調査ではこうした実態は把握できず、被差別経験の持ち主からは学校や職場、恋愛の場面等、典型的なアイヌ差別が語られていた。こうしたことから、アイヌ集住地域としての旭川市では、かつては比較的あからさまなアイヌ差別が蔓延っていた時期もあったと考えることができるだろう。こう考える背景には、地域住民調査において、壮年層の対象者の親世代にアイヌへの偏見をもっているケースが多かったことも関係する。

旭川市の特色として、アイヌの人々が“近文アイヌ居住区”に強制的に集住させられることによって、民族差別の実態が見えやすい構造になっていたということができるのではないだろうか<sup>3)</sup>。

被差別経験率をジェンダーという視点で見た場合、旭川調査は他の地域と同様に、男性よりも女性の方が多く差別を経験している。しかし、あるアイヌ男性からは、学校、職場、恋愛の場面のどこにおいても差別を受けてきたというエピソードが語られていた。同じようにアイヌ男性が人生のあらゆる局面で差別を受けてきたというエピソードは、過去に新ひだか調査でも把握できている（菊地 2013）。こうしたことから、アイヌであることによる被差別経験を断片的に捉えていくという方法だけでなく、アイヌとしての個人の生活史の中にどのように差別経験が折り重なり、現在のエスニック・アイデンティティの形成や生き方に結びついているのかといったアプローチでの分析も今後は求められているといえる。世代差、ジェンダー差、地域差を視点とした検討に加え、今後の課題としたい<sup>4)</sup>。

#### 注

- 1) 旭川調査においてアイヌの人々としてインタビュー対象となったのは全部で14名だが、ここには和人が3名含まれている（すべて配偶者がアイヌの血筋というケース）。これまでの調査報告と同様、アイヌとしての被差別経験者の分析においては和人の3名は対象外とする。ただし、第3節第1項ではこの和人配偶者たちに焦点を当てている。
- 2) 被差別経験の有無に関してもこれまでの調査報告と同様に、本人が自分に対する差別があったと語る場合に、被差別経験ありとしてカウントしている。
- 3) ただし、旭川市では大正末期から熊彫りが栄え、昭和28年には元旭川市長の五十嵐広三を中心に、アイヌ民芸品の製造・販売がアイヌだけでなく、和人を多数動員して推進されてきた（斎藤 2012）。こうした歴史をふまえれば、アイヌの人々に対する差別の蔓延という見方も当時のひとつの局面にすぎないことを強調しておきたい。
- 4) なお、今回の旭川調査におけるアイヌとしての対象者は旭川アイヌ協会の加入者と、アイヌ協議会の加入者が存在する。アイヌとしての分析対象となった11名のうち、その所属の状況と被差別経験の有無を照らし合わせてみると（表7-3）、被差別経験があるのはアイヌ協会加入者に3名、協議会加入者に2名（うち1名は現在では脱会）、被差別経験がないのはアイヌ協会加入者に1名、アイヌ協議会加入者には5名となっている。つまり、被差別経験の持ち主はアイヌ協会加入者に多く、アイヌ協議会加入者で被差別経験を語っているのは現在脱会している1名を除けば、わずか1名しかいない。この偏りがなぜ生じているのかはここでこれ以上に検討できないが、次の2つの解釈が成り立つことを指摘しておきたい。一つは、それぞれの団体の特色が加入者の被差別経験の受け止め方に差異をもたらしているという可能性である。もう一つは、語るべき被差別経験をもたない人たちがアイヌ協議会に多く加入し、そうではない人々がアイヌ協会に加入しがちであるという可能性である。

表7-3 被差別経験の有無×アイヌに関する所属団体

単位：人

	アイヌ協会	アイヌ協議会
被差別経験あり	3	2
被差別経験なし	1	5

## 参考文献

- 菊地千夏, 2012, 「アイヌの人々への差別の諸相——生活史に刻まれた差別の実態」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 143-56.
- , 2013, 「アイヌ差別の諸相——民族差別と民族内差別」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 38-50.
- 小野寺理佳, 2012, 「アイヌとジェンダー」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 61-93.
- 佐々木千夏, 2016, 「現代におけるアイヌ差別」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書35 先住民族多住地域の社会学的研究——札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象として——』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 45-70.
- 斎藤玲子, 2012, 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治, 伊藤敦規編著『世界のなかのアイヌ・アート』(先住民族アート・プロジェクト報告書), 45-60.
- 新藤慶, 2019, 「アイヌの子どもと教師の関わり——北海道札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町での実態調査から」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』68, 141-56.

(佐々木千夏)

